

ある。

とくに、この分野の研究に関連して、先生が精力的におこなったパーソンズ等、現代アメリカ社会学の新しい潮流の導入が、わが国の社会学の発展にもたらした影響は至大のものであったといえよう。先生は、これら一連の研究を通して、現代の大衆社会を特徴づける新中間階級の登場とその社会的性格の解明において学界に貴重な一石を投じたのである。

また先生には多くの立派な訳業がある。D.リースマン『孤独なる群衆』（みすず書房、共訳）、K.マンハイム『体系社会学』（誠信書房、共訳）、A. B. ウラム『イギリス社会主義の哲学的基礎』（未来社）、T.パーソンズ『政治と社会構造・上』（誠信書房、

共訳）、E. F. ボーゲル『家族と親族』（パーソンズ編『現代のアメリカ社会学』10）、R. ベンディックス『近代社会』（『同上』21）などなどである。このうち、とくにリースマン『孤独なる群衆』については、これを知らない人はいないくらいのものであろう。

以上、先生の業績の一端を思いつくままに紹介したにすぎない。しかも、これは社会学には縁もゆかりもないものが記したものである。もっと重要なことで見落していることや、ピントはずれの紹介をしている面が多々あるかも知れない。いたらない点については皆さんのご寛容を願うとして、今はただ先生のご冥福を心から祈るばかりである。



教育実習を終えて



教育実習がはじまるまでは、不安と期待が入りまじって落ち着かなかった。先輩から実習についての話を色々聞いて、少しではあったが心の準備をしておいた。が、実際に経験したことと、先輩の話と違っている点が多かった。これから書くことは、あくまで自分が経験したことであって、参考程度にとどめておいて下さい。

実習は、授業参観からはじまって、実習授業、そして、研究授業で終わった。授業参観は、指導教官の授業から始めて、実習生の授業でも行った。実習の初め頃はこの授業参観が主体になった。参観している間に授業の組み立て、流れを把握するのが第一の目標であったような気がする。細かい点も気がつくようであるが、それは授業を受け持ってからにすればよいと思った。なによりまず、授業の流れをつかんでしまうことだ。

第一週の後半から実習授業をすることになった。第二の目標は、指導案をきちんと書くことだった。それに、指導案通りに授業ができるかどうか気がなった。だが、指導案は、学校に色々参考書が備えつけてあったので、なんとか書けた。ここで一番気をつかったのは、50分の内容はどれだけで、その50分の授業のポイントをどこに置くかであった。また、内容の程度はクラスの中程度の生徒を標準とするものでなければならぬことにも、気をつける必要があった。

指導案ができると、いよいよ授業である。教科書、出席簿、チョーク、コンパスを持ち教壇に立った。

環境科学コース 土江 健雄

40人余りの生徒が一勢にこちらを見ることはわかっていたが、思わずチョークをもつ手がふるえた。あがっているんだなあと自分でわかっていたが、自分でもどうしようもなかった。授業の終りの礼がすむと本当にはっとした。と同時に反省会で何を言われるやらと思って気が気でなかった。ここで、第三の目標は、生徒の反応をみながら授業をすすめていくことだったように思う。

反省会は、数学科の実習生が2人しかいなかったのので、指導教官の授業がない時限を選んで行った。授業を行った実習生がまず反省をし、もう1人の実習生が気のついたことを言って討論し合い、最後に指導教官の所見、感想等のまとめがあった。最初の反省会では、ほろくそに言われることを覚悟していた。が、さほど大きな失敗もなく、初めにしてはまあまあだと言われ、まず一安心。第一の難関を突破したような気がした。そんなことで、第一週目は授業の感覚を覚えることぐらいで終わってしまった。

第二週目にはいると、受け持つ授業も多くなり、本格的に取りくむことができたような気がする。指導案の作成はたいへんだったけれど、次第に、生徒を前にしてしゃべるのが楽しくなってきた。それというのも、自分が受け持ったクラスはおとなしく、最初は質問が一つもでなかった。それが、3時間、4時間と授業をやっていくうちに、質問がでるようになり、クラス全体が活発になってきた。自分にも経験があるけれども、授業中、内職をしていた生徒も、少しずつではあったが、自分の話すことを聞いて

てくれるようになった。「やっぱり、実習に来てよかった。」と思ったのは、実習9日目だった。

あと3日しかない。その間に研究授業もあるのでその時は実習中で最高の授業をしてやろうと張り切った。が、いざ研究授業になると、カメラまで自分の方を向き、参観に来た人がいつもの3倍以上もいたので、緊張してしまった。やっと自分のペースをつかんでいたのと思うと、残念でならない。しかし、なんとか実習授業が終わったという解放感、目標をもって、一步一步前進していったという充実感があった。もしかしら後輩のみなさんは、毎年撮られているビデオを見て、研究することもあるかと思えます。

ホームルーム(HR)を受け持たせてもらったのは、総科では自分1人だった。原則として総科生はHRを受け持たないが、指導教官の特別な計りだった。

教育実習を終えてから、5カ月余りが過ぎた今、当時を思い起こしながら、教育実習の感想を述べることは、非常に気重い。当時の教職に対する新鮮なイメージも、今は変形し、色あせてきているのですから……。

では、教育実習の前後の教師観、また私達の実習の様子など、これから教育実習を受けようとする諸君に、いくらかでも参考になればと思いつつ述べてみようと思います。

私は、他の5人とともに「高校地学」を希望していました。教育実習の日程、オリエンテーションなどの掲示があってからは、私達の話題といえば教育実習に関することばかり。たしか5日の半ばだったと思います。その内容は、実習に対する不安を互いに確かめ合うものばかりで、この場合、先輩諸氏からの情報は、その不安を解消させる薬とはなりません。

福山への出発を一週間後にひかえたある日、誰からともなく次のような提案が出されました。それは、「模擬授業をやってはどうか」というものでした。その提案はただちに可決されました。実習期間中に進行する授業の範囲はすでに知らされていましたから、それを6つに分け、各自が担当し、他の者を生徒にしたて、自分は教師として教壇に立つというものです。50分間の授業の後、感想を述べ、授業の進め方に対するかなりきびしい批評もありました。

この模擬授業から得たものは多く、例えば教科内

HRを持ってよかったのは、授業とは違った生徒とのふれあいがあったことだ。特に球技大会も近くて、練習にも参加した。実習終了後の球技大会の当日も応援にかけつけた。自分のクラスが得点をあげるたびに拍手を送った、授業ではみられないはつらつとした生徒たちの姿をみることができ、たいへんうれしかった。球技大会が終わって初めて、「ああ、これで教育実習も終わった。」という実感がした。

最後に、将来の職業として教師を考えていましたが、4年になって、それも8月下旬になって、地方公務員になろうと決心しました。そんなわけで、教師になることはあきらめました。教育実習に行ったことは、たいへんよかったと思っています。人を教えることは、たいへん難しいことですが、魅力あることです。これから実習に行かれるみなさん、実習で何かをつかまれることを期待します。

環境科学コース 東 敏 生

容の十分な理解さえあれば(実はこれが一番のくせ者なのだが……)心配することはないだろうという心構えもできたようです。とにかく5日間のこの模擬授業は、私達6人にとっては非常に有意義であり、「人前で話すことが苦手だ。」などの不安をかき消す特效薬の役割りを果たしました。

実習での初日、私達は「教師観」を問われました。そのときどのように書いたか、正確には思い出せませんが、だいたいつぎの様な内容ではなかったかと思えます。

「教師」のイメージについては、今まで、教職専門科目の講義を受けたにもかかわらず文章に書けるだけまともでない。ただ、小中高校時代の先生を思いうかべることができるのみである。しかし、まさにその先生方からの影響によって、私は教師に魅力を感じるようになったのだ。社会の中での教師の立場を考えると、子供(これは、社会の次の世代を担う大切な存在である。)が成長する段階で、彼らの親のつぎに、また場合によっては親以上に、長時間顔をつき合わせねばならない位置にある。さらに言えることは、相互の関係が他人同志であるがゆえに、親以上に彼らに影響(良い影響も悪い影響も共に)を与える存在であるということである。子供達は、先生の話す事、行動はすべて正しいと思うし、実際にまねたりもするだろう。教師は人間の鏡的存在でなければならない。

さて、実習での私達の日課の大部分は、指導案作

成に費やさねばなりません。その日の授業が終われば、ただちに次の授業の指導案にとりかかり、前夜遅くまでかけて作成、それでも満足なものではありません。調べ過ぎるということはないのですから。今思えばとても短い2週間であり、「かってこれほど机に向かったことがあったろうか。」と本心から思えたものです。この気持ちは、実際に経験してみなくては味わうことはできないでしょう。(とてもいい気持ちですよ!!)

現在の教師観

教師とて人間、神様じゃない。矛盾のない人間は

教育実習も今となっては、懐かしい思い出となってしまいました。もう1回チャンスが与えられるならば、もっといい授業ができるんじゃないかと思うのですが……。

恥ずかしい話ですが、実習へ行く前にこういうことを勉強したとか言えるものはありません。でも、いろいろ指導案の立て方など勉強したとしても、実際に授業をしないことには、何もわからないと思います。それよりも教育実習へ行く前に勉強するなら、生徒が学んでいる内容を深く、また専門的な面からも勉強しておいた方が良いでしょう。

私は、中学生を教えたかったのですが、化学の実習生は全員、高校2年生の担当となりました。各人、1クラスを3時間続けて受け持ち、その3時間で教える範囲を先生から示され、自分で3時間の配分を考えて授業をしました。たまたま。私は最初の1週間全く授業がなく、先生の授業の参観、他の実習生の授業観察と自分の授業内容の準備のみで、早く授業がしたいなあと思う気持ちと、誰々の授業はすごく良かったとかいうのを聞いて不安に思う気持ちで、落ちつかず過しました。けど、1回授業をすると度胸もすわるもんです。それに、授業が終わった後の反省会でも、メチャクチャけなされるし、意地になれます。しかし、いくらきっちり時間配分を考えて授業に臨んでも、いざ授業をやり出すと脱線の連続でした。いい意味で、授業のテクニックが絶対必要だと思います。もっとも、教育実習程度をやったからといってテクニックが身につくとは思えません……。

私は、担当の先生から、「嘘を教えるくらいなら、授業をしない方がマシだ!!」と言われました。そし

くないように、教師とてまちがいはする。それを責める必要もない。ただ私は思うのである。青年期にはだれもが突き当たる問い、「人生とは何か」「人間いかに生くべきか」を、いつまでも忘れることなく、持ちつづけることのできる人、自分の進むべき道、あるべき姿を常にさがし求めている人ならば、その人は教師である。と……。教師観というよりは、人間観といえるだろう。

(補足or蛇足)

私が教師になったら、生徒の先頭に立ってグラウンドを走るような、そんな教師になってしまいそうだ。

環境科学コース 仙波 裕子

て、教師は、自分の教える科目に対して、専門家でなくてはいけないと強調されました。私が、教育実習を通して一番強く感じたのもこのことです。教師は生徒に教えられるだけの知識を持ち、またその知識を得るためにもいつも自ら学ぼうとしていなければならないということです。それから、私は理科を生徒に身近なものとして感じてもらいたいと思います。柿の実が落ちること、川の水が流れることなど身近な問題として捉えさせたいのです。それと理科を通しての考える訓練みたいなことを目指したい。ですから、生徒が自分の身の回りにある何かに疑問を持って、自分で考えることができるようになるというのが私の理想です。だからそういう風に生徒を指導できる教師になりたい。

教育実習を通して感じたのは、自信を持って生徒を指導できる教師になりたいとそればかりだったのですが、その後、ある先輩と話していて少し考えが変わりました。その先輩は、それだったら自分に自信のないことは生徒に要求できないではないかと言われました。それより、自分もここまでできないけれど、私は努力している、だから君も頑張ろうという教師であるべきではないかと言われたのです。この話を聞いて、私も、もっと素直な気持ちで生徒と共に努力できる教師になりたいと思うようになりました。

私は、自分が人を相手にするのに向いているのかいないのかよくわかりません。でも教師をやりたいと思います。もっと信念があってしかるべきだと批判されそうですが、今はとにかくやってみようと思います。

教育実習についてのはずだったのに話が変な方向

へ行ってしまいました。私は、教育実習は、教師になるならにかかわらず、経験してみたらいいと思います。ほんとうにいろいろ考えさせられます。

教育実習終了後しばらくの間、何となく頭と体の変調を訴える人が多い。これは“教育実習ボケ”などと呼ばれている。それまでの厳しい生活から急に大学生らしい生活に戻ったためにペースがつかみきれないうえに、緊張感というたがが緩んで疲労が一時に表に出たことがその原因かもしれない。

英語科の場合、実習生1人あたりの授業時間数は6時間前後で、これ自体は決して多すぎる数字ではない。しかし、その準備に要した時間は予想をはるかに上まわるものであった。たかが中学生の教科書とは言うものの、いざ理解してもらうとなれば、話は別である。辞書や文法書などをひっぱりまわしたり、指導案を書いたりしているうちに、時計の針が午前4時を回っていたことも、二度、三度ではなかった。教師というのはまともにやれば体が持たぬ職業だと思つづく思つたほどである。

そうして作成した指導案を携えて教壇に立ったが、

ほんとうに教職をめざしている人はもちろんのこと、単に資格を取っておくだけという人も、あるいは付和雷同的に階性で教職単位を取っている人も、教育実習だけは是非参加してほしいと思います。この期間にして2週間たらずの貴重な体験は、参加したひとりひとりの胸に少なからぬインパクトを与えてくれるでしょう。

本来ならばここで、私は先輩として「真に教職に就こうと考えている者以外は、実習に参加すべきでない」と文部省のエライさんのようなことを書くべきかもしれませんが、確かに、非教師志望の学生までが実習に参加するのは、学務の御苦労と福山附属の御好意に甘えすぎているといえます。しかしそんなことにあえて目をつぶり、高い宿泊費用をひねり出してまでも、志望はどうあれ、やはり福山まで行ってほしいと私は思います。教育実習とは、そうするだけの価値が十分にある経験であるといえまし

地域文化コース 大山茂之

睡眠不足と実力不足は如何ともしがたく、それに加えて何とも言えぬ緊張感のために、簡単なつづりを間違えたり、テープレコーダーの操作を誤ったり、自分でもおもしろいほどミスが頻発する。そういうときには、すかさず「ピシー」という警告音が生徒から飛んできた。言語活動の展開なんて、とても、とても。授業も筋書きのないドラマ？まさか。

しかし、それにもめげず回数を重ね、外国人離れた発音を教えるのに臆することもなくなり、生徒の半ばあきらめたような表情まで読みとれる余裕ができるようになると、教育実習も終わりに近づく。

失敗するのは実習生の特権だから恐れる必要はない。けれども、いつも教室には45人の生徒がいることは忘れてはならないと思う。

最後に、いつも適切なアドバイスをくださった教官の方々、2週間じっと耐えてくれた生徒のみなさん、ほんとうにどうもありがとう。

社会文化コース 白石裕之

よう。

従ってそのためには、少なくとも実習期間中は、教師志望のいかんを問わず、誰もが将来教師になるつもりで真剣にとりくんでください。ここにきて、どうせ資格を取るだけなんだという安易な姿勢で望むのは、何より生徒に対し失礼であるだけでなく、時間とお金のムダでしかありません。

老婆心から、こまごまとした忠告をしようかなとも思いましたが、やめておきます。すべては、実際、体験し四苦八苦しながら、自らの力で学び取ってください。いざ教壇に立って頼りになるものといえば、自分が前の晩に、教科書と参考書と辞典と虎の巻をどのくらいひっくり返したかということだけです。

授業のあと教壇で女子中学生に囲まれたO君や、ついに女子高生のファンクラブまでできたM君などの華麗な伝統をけがすことなく、総合科学部の後輩諸君、がんばってください。

国語科の教育実習は、3人ずつ2つのグループに分かれ、それぞれが1つのクラスを1週間受け持つ形で行われた。僕の場合、実質的な自分の授業は、第1週で終わってしまい、後半の1週間は他人の苦闘—教材研究から指導案作成までの過程、実際の授業の様子等々—を、かなり冷静な面持で眺めることができた。その時に思ったことなど、1つ2つ書かせてもらおう。

教育実習で、皆が確実に学べたことと言えば、技術的なこと(教授法)だろうか。VTRで、自分の授業の仕方と生徒の反応の仕方を客観的に見ることができたし、毎時の反省会でも、他人の意見で素直に受け入れられるのは、生徒の活動に対する注意の向け方とか話し方、板書の仕方、時間配分に指名の仕方までの、より良い方法について。そういったものは、かなり納得して受け入れられるし、他の人の授業を見て、いくらでも参考になることは見つけられる。授業をやる毎に、必ず「うまく」授業が進められるようになる。生徒の活動を余裕をもって眺め、時間配分にも生徒の質問にも臨機応変に対処し、時には、サラリと冗談さえ言えたりする。

確かに、教授法は直接現場で仕事をする際には、必要不可欠のものである。教師の仕事として、実際に表に現れて、生徒が見るものは、ほとんどこの教授法の部分であるのだから。テクニックが貧弱であれば、いくら教材研究を綿密にやり、授業の目標を立て、しっかりとした指導案が出来たところで、生徒には何も伝わらない。大学の教官みたいに、学問の実績と人間性、学生の自主性などに頼ることは出来ない。だから、教授法の重要性は、十分に認めなければならないと思う。だが、たかが2週間の実習では、教授法がうまくなっても仕方がない気がする。

国語科では、3人が同一教材に取り組んだわけだが、3人共に授業内容は異なっていた。もちろん、授業テクニック等を差し引いての相異である。

国語科の教材研究は、参考書や事典に頼れるものではない。知識として、辞書の言葉を調べても仕方がない。要は、いかに僕らが読みこなしたかだ。教材を、それこそあきれるくらい読み込み、一つの助詞、一つの言葉もおろそかにできない。読めば読む程に、生徒に気づいてほしい、理解してほしい、考えてほしいと思う個所が見えてきて、時には、題名1つで50分くらい簡単に過ぎるくらいの授業になってしまいそうになる。そうした教師としての欲求の

中で、僕は、それぞれの視点により、取捨選択していく。当然、授業のプロセスも、到達点も僕らの人数分だけ存在することになるのである。

このことは、重要なことだと思う。他の人の指導案を見、実際の授業も見て、どうしてあんな風になってしまうのだろうかと思ふ。もっと重要なことがあるのではないかと、とも思う。僕の授業に対しても、必ず批判が出てくる。しかしながら、お互い容易には納得しない。授業のテクニック云々は素直に受け入れ、次からは充分気をつけようと思っても、自分の教材研究に対する批判は、尚納得しかねるところが残る。もちろん、他の人のすぐれた「読み方」に驚いてしまうことなど度々だし、そういう点を学ぶことにやぶさかではない。

うつろな教育理念しかないにしても、決してゆずれないところがある。そういう所から自分の「国語」に対する考え方が、少しは固まりそうな気がする。また、初めて教師という位置に立ってみて、教師が「教える」などとうぬばれる程の立場でもない気がつく。必死で教材を読み込み、やっとの思いで言葉をつかんで生徒にきいてみると、事もなげに理解していたりする。ただ問題は、自分の理解したことがどれ程の意味を持つのか自覚がないだけのことだ。1つの事象は見えても、まわりへ発展していくまでになっていないだけのことだ。あるいは、教師側の引き出し方がまずいだけのことだ。国語に関しては、強いてそう言い切りたい。

ともあれ、実習の2週間は、「いい思い出になったなあ」と、軽く流し切れぬ重さは残った。ただ、未だもって、明確に自分なりの教師像を描ききれないでいる。実習では、学習指導の面が主であったし、生徒と話したりしても、学生としてその場限りの安易な話題ですまされた。いわば、教師としての生き生きとした部分が中心だったと思う。これだけが教師の仕事じゃない、というのはわかっているのだが、それ以上抜け出すことが出来ないでいるから、「私の目指す教師」なんて考えようもない。「教師になってみないとわかりません」などと答えたら、やっぱり採用試験じゃ落とされるかな、といやに現実的なことを気にしながらも。